

文字の解説

吉池孝一

—

解説の話に先立ち、基本的な用語を確認しておきたい。これより、文字、表音文字、表意文字、解説と称するものについて次のように考える。

文字。文字とは何か。中国の著名な言語学者であり、物理学者の顔も持ち、第二次大戦中には暗号解説に従事したという趙元任氏によると、「言語を表わす視覚的な記号は文字である」という。趙氏によると、たとえば、記号のをみて、「毒薬」「有毒」「危険」「poison」などと様々に言うことができるのは、この記号が直接に意味を表わしており、特定の言語に対応していないためだという。もしも、記号を、「有毒」という言葉のみに対応させ、「毒薬」「危険」「poison」などには対応しないと決めたならば、この記号は文字となる¹。ここでいう「言語」は音声言語すなわち私たちが使用している言葉の音をさすと考えてよい。私は趙氏のこの考えに賛同する²。

別の言い方をすれば、「文字は一定の言葉音を表わす視覚記号」ということである。文字は特定の文脈で臨時に言葉音と結びつくのではなく、どのような文脈に於いても、また単独であっても、繰り返し一定の言葉音と結びつく。したがって、一定の言葉音を表わさないものは文字ではなく、単なる記号である。意味だけ表わす文字というものはないということになる。このように言うと、「河」という文字の「氵」は水に関するものを意味するが「河」の言葉音とは関係が無い故、これは意味だけを表わす文字と言えるのではないかとの異議がでるかもしれない。しかし、文字を構成する要素となった「氵」を独立の文字とは見なさない。それは木偏や草冠なども同様である。

表音文字と表意文字。さて、文字には2つの機能すなわち働きがある。1つ目は音を表わす機能で、2つ目は意味を表わす機能である。この2つの機能を駆使して語を表記する。すなわち、「o」「n」「e」「か」「わ

¹ 趙元任 1997:140-141 頁参照。もと 1959 年、国立台湾大学文学院印行。

² 趙氏の文字の定義については、かつて吉池孝一 2002 で紹介したことがある。

などを用いて「one (1)」や「かわ (川)」を綴るように、音を表わす機能のみを働かせて表語する場合、普通その文字を表音文字と呼ぶ。他方、「一」「川」のように音と意味を表わす機能を同時に働かせて表語する場合、普通その文字を表意文字とか表語文字³などと呼ぶ。ここでは一般的な用法にしたがい表意文字という用語を使用する。それは、意味だけを表わす文字はないという前提で表意文字という用語を採用するわけである。そして、表音文字も表意文字も、どちらも最終的には語を表わすこと即ち表語を使命としている。

解説。 解説というと、暗号解説、パスワード解説、文字化け解説などいろいろな解説があるけれど、文字の解説というと、いうまでもなく未知の文字で書かれた言葉の意味を読み解くことである。それでは、ロシア語やロシア文字を知らない人がいたとして、辞書と文法書を片手にロシア文を読み解いていく場合、解説と言っても良いかというところではない。それは解説ではなく、英文読解などというときの読解とか解釈にあたる。かつて、ポープという研究者が『古代文字解説の物語』という本の前文でこんなことを言った⁴。「解説とは門を開くことであり、解釈とはその向こうにある広がりに関わることなのである」と。「門を開く」とはなかなか言い得て妙である。未知の文字によって書かれた文がある。その文を理解するための「手続き」そのものを発見しながら読み解いていく、これが解説ということになる。この手続きの発見に解説の醍醐味があるのであろう。

二

さて、ここに次のような文字資料の断片がある。

—Здравствуй, Пётр Иванович, мой дорогой друг ! Как ты изменился ! Волосы у тебя седые и редкие, ты потолстел . . .

—Простите, но меня зовут не Пётр Иванович, а Фёдор Николаевич.

—Как? Ты изменил даже имя? !

「やあ、今日は、ピョートル・イワーノヴィッチ君！君はずいぶんかわったねえ！髪の毛は白いし、薄いし、君は太ったなあ…」

「失礼ですが、私の名前はピョートル・イワーノヴィッチではなくて、フョードル・ニコラーエヴィッチと申しますが。」

³ 表語文字という用語については河野六郎 1994 の 1-29 頁参照。

⁴ モーリス・W・M・ポープ著/唐須教光訳 1982 の「前文」7-8 頁参照。

「おや？ 君は名前まで変えたのかい？」⁵

これは内容が対応したロシア文と日本語である。ロシア文字もロシア語もまったく知らない人にとっては未知の文字と言語ということになる。参照するものといえば日本文以外にない。これからどのようにしてロシア文を読み解いていったら良いであろうか。

先ず文字がどのような性質の文字であるか見当をつける必要がある。ローマ字のような表音文字（表単音文字）ならば、数十種類の文字で用が足りる。同じ表音文字でも、日本語を表記する平仮名や片仮名のように子音と母音を一文字で表わす文字（表音節文字）ならばもう少し多目に文字の種類が必要となる。漢字のような表意文字ならば数千種の文字が必要となる。日本語を綴る文のように漢字と仮名が混じったものならば、文字数はやや少な目になる。したがって文字数は次の① から④ の順に増えていく。

- ①表単音文字（ローマ字など） 数十種類
- ②表音節文字（仮名など） 数十種類
～数百種類
- ③表音文字＋表意文字（漢字仮名混じり文など） . . 数百種類
～数千種類
- ④表意文字（漢字など） 数千種類

さて先にロシア文であるが、まずは使われている文字の累計数と種類を数える必要がある。文字数を数えるといっても、厳密に言えばどこまでを文字の1単位とするかという大問題がある。未解読文字の場合、それが分からないのが建前であるが、とりあえずは直感に頼って要素の数をかぞえてみるしかない。ロシア文のほうは、「文字」の累計が160で種類は28。日本語のほうは、文字の累計が121で種類は61である。漢字仮名混じり文で使われている文字の種類はロシア文の倍以上ということになる。ロシア文のほうは、累計数が多いにもかかわらず、「文字」の種類は少ない。すなわち同じ「文字」が繰り返し使用されているわけである。これより、表音文字である可能性が高くなる。そこでとりあえず、表音文字という前提

⁵ 小沢政雄 1992 の 226-227 頁による。なおアクセント記号は省略した。

で解読を試みることとなる。

三

次に、ひとかたまりの文字群が1語に相当するのではないかと予想を立てることが許されよう。文字の使命は語を表わすことにあるから、語の区切りを見つけることは大事である。もっとも、語のまとまりの表わし方は様々である。現在のロシア文や英文は空白を設けて語の切れ目を示し、日本文は仮名と漢字を混用しその字形の違いにより語の切れ目を示す。語の切れ目が形式の上にもまったく現われない場合もある。いろいろであるが、語のまとまりが表現されているかどうか、表現されているとしたならばそれはどの様なものか、という所に目を付けることは解読にとって欠かせない。問題は、それからどうするかである。あらかじめ作られた海図はない。それぞれの資料の状況に即して様々な手順を編み出して読み解いていくしかない。

音の解明。 対応する日本文をみると、人名「ピョートル・イワーノヴィッチ」が2回現れる。対応するロシア文の中にやはり2回あらわれる「Пётр Иванович」があり、それが相当すると推定し得る。再度日本文をみると、人名「フョードル・ニコラーエヴィッチ」が1回現れる。この人名と先の「ピョートル・イワーノヴィッチ」と比べると、語末の「……ル」と「……ヴィッチ」が共通している。そこで、「Пётр Иванович」の2つの語末の「……р」と「……вич」が「……ル」と「……ヴィッチ」に対応すると仮定し、同様な綴りをロシア文の中に探すと、「Фёдор Николаевич」がある。そこで、これまでに判明した人名を並べてみると次のようである。

①ピョートル・イワーノヴィッチ

Пётр Иванович

②フョードル・ニコラーエヴィッチ

Фёдор Николаевич

日本文①②の語末の「……ル」と「……ヴィッチ」が、ロシア文①②の語末の「……р」と「……вич」に対応しているばかりでなく、これは予期しなかったことであるが、①②の1語目の「ョー」も「ё」に対応していることがわかる。この対応に無理はなさそうである。こうして、一部ではあるが、片仮名を介してロシア文字の概略的な音を解明できたことになる。資料が多ければ、同様の作業を繰り返し、次々にロシア文字の音を

明らかにすることができる。

語義の解明。語の意味の解明も不可能ではない。日本文をみると、主語に当たる「君は」が3回現れる。ロシア文にも同じ語が同じ回数現れることが期待される。その部分を探すとты(3回)が候補としてあがってくる。このような当て推量は確実ではないけれど、積み重ねがあれば意味の解明につながっていく。資料が多ければ、同様の作業を繰り返し、次々にロシア文の語義を明らかにすることができる。

これで上の未知の文字資料につき、その文字の音の一部と語義の一部がわかった、ということになる。未知の文字資料が表音文字の場合、何らかの方法を用いて一部の文字の音を推定できれば、それを応用して単語の音形を知ることもできる。単語の音形がわかれば、その資料を取り巻く近隣の言葉、それは現在のもので過去のものでいいのであるが、その近隣の言葉の音形と比較対照することによって、未知の単語の意味と用法を推定することができる場合がある。運が良ければ解読は急速に進むこととなる。以上は表音文字の話である。未知の文字資料が表意文字である場合、1字1字個別に解明しなければならず、よほど条件がよくないと十分な解読には至らない。

表音文字、表意文字のいずれにしても、先に見たロシア文と日本文のような内容が対応した資料があれば解読の突破口となる。このような資料、すなわち意味や音が対応した2つ以上の異系統の文字乃至言語の資料を「対音対訳資料」という。もっとも、「対音対訳資料」には未知の文字と既知の文字という組み合わせもあれば、既知の文字同士という組み合わせもある。いずれにしても「対音対訳資料」は言語史の解明に重要な手がかりを提供する⁶。

四

以上は解読の一般的な話であった。次回より東アジアの文字につき、その解読の初期の状況を確認し、未知の文字資料を理解するためにどのような「手続き」が採られたかを考える。まずは表意文字の甲骨文字と西夏文字を扱う。次いで表音文字の契丹小字とパспа文字を扱う。

⁶ 対音対訳資料には、楔形文字で記されたアッカド語とシュメール語の対訳語彙集のように、同一文字で異系統の語を記したものもある。また、先に見たピョートル・イワノヴィッチと Пётр Иванович は対音資料であるが、対音資料には幾つかのパターンがあり、この点については中村雅之 2006 が参考となる。

なおこれは、個々の文字資料を検討するさいに確認することであるが、この4つの文字資料を解読という観点から見て、その相違点と類似点を整理するとなかなか興味深いものとなる。甲骨文字とパспа文字は同系統の文字との比較を柱として解読が進められたところに共通点がある。同系統の文字との比較が可能な場合、解読はわりあい順調に進むようである。他方、西夏文字と契丹小字は異系統の文字からなる対音対訳資料の利用を柱とする。西夏文字の場合豊富な対音対訳資料に支えられ順調に解読は進んだが、契丹小字の場合対音対訳資料の質と量は共に寥寥たるもので未だ解読の途上にある。なおこの4者は、主に漢字漢語の比較対照資料を用いて解読がなされたという点で共通する。

〈参考文献〉

- 小沢政雄1992. 『ロシア語の入門』, 東京: 白水社。初版は1978年。
- 河野六郎1994. 『文字論』, 東京: 三省堂。
- 中村雅之2006. 「対音資料とは」 『古代文字資料館サイト: いろいろな概説』
<http://www.for.aichi-pu.ac.jp/museum/>
- モーリス・W・M・ポープ著/唐須教光訳1982. 『古代文字解読の物語』, 東京: 新潮社。
- 吉池孝一 2002. 「文字の定義: 趙元任氏の説による」, 『KOTONOHA』2号, 12-13頁。
- 趙元任 1997. 『語言問題』, 北京: 商務印書館。もと1959年、国立台湾大学文学院印行。